

2020年4月19日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 96 編 1～13 節

ルカによる福音書 8 章 1～3 節

「奉仕する人々」

<神の国の福音>

イエスさまは、「神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。」とあります。神の御子であるイエスさまが、この地上に来られてなされたことは、「神の国の福音を告げ知らせる」ということです。

「神の国」とは、「神さまのご支配」という意味です。それは、神さまから離れ、罪と死の支配の中にあつた人間が、罪を赦され、神さまの愛のご支配の中で、新しく生きる者とされることです。

イエスさまは、町や村を巡って、この良い知らせを人々に告げておられました。

ところで、イエスさまは人々に、「この神の国に入るために、良い行いをしなさい。人に役立つことをしなさい。そうしたら報われて、神の国に入れます。」とっておられたのではありません。

イエスさまが告げて下さったのは、「もう、救いはここにあるよ。わたしのもとにあるよ。」ということです。イエスさまは、「わたしが来たから、神の国は、救いの約束は、わたしによって実現した(4章16～21節)。もう、わたしと共にいるあなたたち、今、わたしの言葉を聞いているあなたたちは、神さまのご支配の中にいますよ。神さまの愛の中に招かれていますよ。」とっておられたのです。

イエスさまは、わたしたちを罪人のまま、救いへと招いて下さいました。善い人になったら救われる、というのではありません。

それは、罪に捕らわれているわたしたちは、もはや自分の力や努力で、神さまの目に本当に正しい人となることは決して出来ないからです。だから、イエスさまが来て下さり、ご自分が十字架で死ぬことによって、ご自分の命でわたしたちの罪を償って下さるのです。この救いを実現するために、神の御子イエスさまは人となられ、わたしたちのところに来て下さったのです。そして、ご自分が実現して下さる救いの恵みへ、神の国へと、すべての人を招いておられるのです。

今日の聖書には、そうして神の国へ、イエスさまの救いのもとへ招かれた人々のことが語られています。イエスさまの「神の国の福音」を聞き、それを受け入れ、従い、イエスさまと共に生きるようになった人々のことです。

<女性たち>

このイエスさまの旅には、十二人の弟子たちが一緒だったとあります。十二人の弟子たちは、この後、9章のところで神の国を宣べ伝えるために派遣されます。そのための訓練期間だったと言えるでしょう。

また10章には、イエスさまが72人を任命されて派遣された、という記事があります。この人たちも一緒にいたかも知れません。すると、だいぶ大きな集団になります。これだけの大所帯の旅は、色々と身の回りのことが大変だったと思われます。

そこに、「多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」とあるのです。この大所帯に女性たちも同行し、この一行に奉仕をしていた。「奉仕」は、もてなす、給仕する、世話をする、という意味の言葉で、今は教会の「執事」という職務に、この言葉が使われています。

女性たちは、イエスさまや弟子たちのために、色々と提供したり、お世話をしたりしていたのです。ルカは、この女性たちの働きを、大切な記録として残しています。

当時のユダヤ人社会では、女性は人数を数える時に、数には入れられませんでした。また、聖書を教える教師や指導するラビが、女性と気安く話をしたりすること、また伝道旅行に女性が一緒について行く、というようなことは、とても珍しく、異様なことだったようです。

しかし、このイエスさまの一行、つまり「神の国の福音」を聞いて、信じ、受け入れた者たちは、男も女も関係なく、共にイエスさまに仕え、互いに出来ることを担って働き、今度は神の国の福音を伝える旅を支える者となったのです。

さらにはこの女性たちの中でも、色々な立場の人がいたであろうと思われます。

今日の所には、「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち」として、三人の女性の名前があげられています。「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」、「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」、「スサンナ」です。

スサンナのことはよく分かりません。

でも、マグダラのマリアは、よく名前を聞くのではないのでしょうか。彼女は、今日の聖書箇所直前の7章36～50節のところで、町中の人から「罪深い女」と言われていた女性ではないか、とも言われます。その女性は、おそらく姦淫の罪を犯したのか、あるいは遊女だったのではないのでしょうか。そのことが町中に知れ渡っていて、人々に軽蔑され、交わりから外され、誰にも許されず、孤独に生きてきたのです。しかし、イエスさまから「あなたの罪は赦された」と告げられた。彼女は、この救いを受け入れ、イエスさまに従って行ったのです。

もう一人は、「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」とあります。ヘロデは、当時この一帯を治めていた領主です。ですから、その家令であるクザという人が、高い身分であったことは間違いありません。ヨハナはその妻ですから、生活もそこそこ上流で、地位もあり、人々にも一目置かれる立場であったでしょう。しかしヨハナは、その生活を捨てて、夫も置いて、イエスさま一行の旅に従って来て、皆のために奉仕をしていたのです。

<分け隔てなく>

遊女だった人と、身分の高い役人の妻。普通に暮らしていたなら、話すことも、出会う機会すらもなかったかも知れません。でも、彼女たちは、今まったく何の隔たりもなく、共に喜んでイエスさまに仕え、また他の人々のために奉仕をしているのです。

これは、まったく不思議な光景に違いありません。でも、このことが起こったすべての原点は、イエスさまの「神の国の福音」です。あなたの罪は赦された。神が、あなたと共にいる。この救いの知らせは、誰にも分け隔てなく届けられます。神さまは、男も女も、身分がどうであっても、ユダヤ人でも異邦人でも、イエスさまを信じる者には、誰にでも罪の赦しを与えて下さるのです。

分け隔てをしたり、人を差別したり、比べたりするのは、わたしたちの方です。

しかし、分け隔てなく神さまの救いに与り、イエスさまのもとで生きる者となった人々は、お互いの間の分け隔ても取り除かれていきます。それは神さまが望まれないことだし、神さまが分け隔てなく愛しておられる兄弟を、わたしたちが分け隔てすることは、全くおかしいことだからです。

イエスさまが共にいて下さり、罪を赦して下さる、この神さまのご支配の中においては、互いに仕え、共に生きる、このような一つの共同体が実現するのです。神さまを愛し、また隣人を愛することが出来る、そんな群れが築かれていくのです。神さまの愛のご支配が、イエスさまに従う人々の間で、具体的に実現するのです。

その中心には、十字架の死によって罪を赦して下さり、そして復活して、今も生きて共にいて下さるイエスさまがおられます。この時代、この場所でイエスさまの救いに与ったわたしたちもまた、この方のもとで一つにされ、共に生きる者とされているのです。

<奉仕>

そして、これらの人々、とりわけ今日の箇所では女性たちが「自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」とありました。

持ち者とは、財産や、物質的なものばかりでなく、才能や、技術、与えられた賜物、その人に備わっているすべてのことを指します。イエスさまの救いへの感謝として、応答として、喜んでそれを献げ、仕えていたのです。

救いに与る、神の国に生きる、というのは、哲学とか、思想とかではありません。

イエスさまが共にいて下さる、罪を赦されて生きる、というのは、わたしたちの人生、生活、生き方そのものです。神さまの言葉、神の国の福音を聞き、従うということは、自分が世の中のしくみについて頭で納得したり、精神的な安心を得るだけのことではないのです。具体的な日々の生活を、御言葉を聞き、祈りながら、神さまと共に生きるということであり、神さまに喜ばれる者、神さまを愛し、隣人を愛する者とされていくことなのです。

この女性たちも、奉仕することで、持っているものを献げることで、生活全体をイエスさまと共にすることで、神の国、神のご支配の恵みの中に具体的に生きたのです。

これは、ただ女性たちが伝道旅行でみんなのために働いた、というお話ではなくて、イエスさまの救いを受け入れ、喜んで従った女性たちが、イエスさまのため、また隣人のために生きる者となり、愛の業を行ない、大切な伝道の働きを担うメンバーとして共にいた、ということなのです。

この女性たちは、この後、イエスさまの十字架の場面、墓への葬りの場面、復活の場面、そして昇天のあとの祈りの場面などに登場します。彼女たちは、イエスさまと共に生き、イエスさまの救いの御業を、恵みを体験し、その目で目撃し、証人とされるのです。

<わたしたちの愛の業>

そして、教会はまさにそのような共同体です。わたしたちは、分け隔てなく、イエスさまの救いに与り、神さまのご支配へと招かれました。わたしたちの生活は、イエスさまと共にあり、神さまへの礼拝を中心としたものになります。

教会では、イエスさまに結ばれた一人一人が、一つになって、喜んで自分に出来ること、自分の与えられた力を献げて、一つになって奉仕しています。兄弟姉妹に配慮し、仕えています。そうして、今日（こんにち）でも教会の礼拝では、生きておられるイエスさまが中心におられ、神の国の福音が、すべての人々に分け隔てなく告知されるのです。

そうした歩みの中で、わたしたちは救いの御業、神さまの恵みを何度も目撃します。癒され、慰められ、立ち上がられます。そうして、わたしたちもまた、共にいて下さるイエスさまの証人とされるのです。

ところが今は、感染症が蔓延し、わたしたちは最も大切にしている礼拝に、神の国の福音が告知され、命の源である神の御言葉をいただく礼拝に、集うことが出来ないうえです。教会で奉仕の業をすることも出来ません。家で一人であることが求められています。歯がゆい思いです。体の弱さのために中々礼拝に来られない方、事情によって来ることが出来ない方も、ずっとこのような思いを抱いておられるでしょう。

でも、神さまはすべてをご存じでいて下さいます。

わたしたちは奉仕というと、何かをすること、献げることなど、積極的なことに目を注ぎがちかも知れません。それは素晴らしい奉仕ですし、自分自身もまた喜んで行なうことが出来ることです。

しかし、もう一方で、神さまの御心ならば、ただひたすら耐え忍ぶということ。隣人のために、苦しみを受け入れるということ。涙を流しながら静かに祈り続けるということ。御心ならば、今はこれも大切な奉仕、神さまと隣人に仕える業であると思うのです。

わたしたちは、改めてイエスさまがなさって下さったことを見つめたいと思います。イエスさまは、わたしたちに罪の赦しを与えるために、この世に来て下さいました。イエスさまは、わたしたちに仕えて下さった。その奉仕とは、わたしたちのためになされた愛の業とは、究極的には、十字架に架かって死ぬということでした。わたしたちの罪を担い、苦しみを受け入れること。ひたすら祈って下さること。ただ十字架の死を耐え忍ぶことです。このへりくだりと忍耐が、イエスさまのわたしたちへの愛の業でした。

わたしたちはこの方の救いに与り、従う者とされました。この方に従うなら、わたしたちもまた、神さまのために、隣人のために、苦しみを耐え忍ぶことがあるに違いありません。

神さまを愛し、隣人を愛すること。愛の業に励むこと。奉仕をすること。それは目に見える結果が出ることや、直接人に喜ばれることばかりではありません。それはいつしか、自分のための業になってしまうこともあるかも知れません。

大切なのは、心からの感謝と、神さまの愛に応えて、自分の思いと体を献げ、神さまに向かって生きることです。神さまを思って、神さまが愛しておられる隣人のために思って、祈りつつ愛の業を行なうことです。そのためなら、自由を持っていても不自由を選ぶこともあるし、強くて弱さを選ぶこともあるでしょう。それこそ、本当の自由です。

今わたしたちは、神の国を告げ知らされた者として、イエスさまのもとで共に生き、神さまを礼拝する者とされています。イエスさまの愛の業によって、癒され、赦され、生かされています。そうやってイエスさまに従う者とされたわたしたちは、常に御言葉に耳を傾け、神さまの御心に適ったこと、隣人を生かし、大切にすることを選び取る者になりたいのです。必要ならば力を尽くして行います。必要ならば静かに耐え忍びます。ただひたすらに祈りつつ、神さまに向かって歩みたいと願います。

そして、その歩みは決して孤独ではありません。お一人のイエスさまに結ばれた者たちと、共に一つにされているからです。そのイエスさまと共に、兄弟姉妹と共に歩む中で、わたしたちは苦しみや困難の中にあっても、神さまを見上げることが出来る本当の喜び、本当の幸いを知らされ、あの女性たちのように、まことに生き活きとした信仰生活を送ることが出来るのです。

【祈祷】

天の父なる神さま

神の国の福音を、わたしたちにも、分け隔てなく告げ知らせて下さったこと。信仰を与え、救いを受け入れる者として下さったことを、心から感謝いたします。

神さまの救いの恵みに応えて、イエスさまの御言葉を聞き、従い、仕える者とならせて下さい。あなたに与えられたすべてをお献げします。自分の思いではなく、神さまの思いを見つめ、神さまを愛し、隣人を愛する行ないをすることが出来るようにして下さい。

どのような場所にあっても、どのような時も、イエスさまが一人一人と共にいて下さり、わたしたちがイエスさまにあって一つに結ばれていることを、覚えさせて下さい。

そして、一日も早く、わたしたちが共に御前に出て、共に御言葉を聞き、一つとなって礼拝をささげることが出来るようにして下さい。また、多くの人々が招かれ、神の国の福音を聞き、共にイエスさまに従って歩む者となる事が出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン